



ボンクリ・フェス2019

“Born Creative” Festival 2019

アーティストック・ディレクター：藤倉大(作曲家)

今年も開催! 世界中の「新しい音」が 聴ける1dayフェス!

注目を集める現代作曲家・藤倉大をアーティストック・ディレクターに迎え、
今年で3回目の開催となる新時代の音楽フェスティバル!



藤倉大 ©Seiji Okuyama

“Born Creative Festival” 通称『ボンクリ』が近づいてきた。略称じゃなく通称? そう、もう三回目ともなれば日本中どこでも『ボンクリ』の名称



アトリウムコンサート 福岡天神 ©2 Faltzcompany
「ボンクリ・フェス2017」より

で通っているので通称に格上げされたのである。で、いつから? そう言えば一回目からだ。二年前に始まったフェスティバルだが、開催準備中の会議に出席していた藤倉大と関係者が当たり前の

ように「ボンクリ、ボンクリ」と呼び交わしているのを聞いて「おそらく英語なんだろう」「可愛いし語感だからきっと新製品のスイーツ?」でもコンサートの打ち合わせだからとひとり取り残され感全開の思いをしたものだった。それが「人は生まれつきクリエイティブである」という藤倉が掲げたくわめて前向きかつ全方位的な素晴らしいコンセプトの意味と知り、会議中であるので、皆に見えないように一人膝を打って得心したのを昨日のこのように鮮明に覚えている。その上、そのプログラムの中の主要な曲目の演奏を我が誇り高き手兵「アンサンブル・ノマド」に任せて頂けることとあって、興奮の目盛りはいやが上にもあがる一方であった。

ボンクリ・フェス2019 “Born Creative” Festival 2019 9月28日(土) アーティストック・ディレクター：藤倉大
ディタイム・プログラム 11:00~18:00 館内各所

詳細はHPへ

□誰でも楽しめる!

無料プログラム

- ◆アトリウム・コンサート
出演：東野珠実(笙) ほか
- ◆「電子音楽の部屋」
監修：檜垣智也



東野珠実 Photo By Kazuhiko Asai 檜垣智也 ©Shoko Kawasumi

□スペシャル・コンサートのチケットで楽しめる! ワークショップ・コンサート

※要スペシャル・コンサートの半券、事前申込制。

- ◆「ノマドの部屋」 演奏：アンサンブル・ノマド
- ◆「アプクトの部屋」 演奏：ヤン・バング エリック・オノレ アイヴィン・オールセット ニルス・ベッター・モルヴェル
- ◆「争の部屋」 演奏：八木美知依
- ◆「電子音楽工作の部屋」 講師：ジルバール・ノウノ(ボンビドゥー・センター<イルカム>研究員)
- ◆「トーンマイスター石丸の部屋」 講師：トーンマイスター石丸



アンサンブル・ノマド ©Mitsutaka 争の部屋 Photo by Akane Taniuchi エリック・オノレ Photo Nishida Katsunori アイヴィン・オールセット ©Hikaru photo_Tester0505yaku ニルス・ベッター・モルヴェル ジルバール・ノウノ

「人は生まれつきクリエイティブである」と藤倉が指している“人”とは勿論世の中のすべての人の意味であるとは言うまでもないのだが、特にコンサートにおいてはそこに集うすべての人間を指す。作品の作者である作曲家は勿論、演奏家、スタッフは当然のことだが、絶対に欠かせないのが聴衆であるあなた自身である、と言っているのである。聴衆を前提としないコンサートなど存在しないだけでなく、聴衆によって音楽が完結するからだ。いくら作曲家が楽譜を完成させても演奏されなければ音楽とは言えず、いくら演奏家が確信をもって演奏しても聴かれなければ音楽とはならない。何故なら聴かれるためにあるのが音楽だから。その音楽も一つの聴き方しか許さないのであればわざわざ演奏する必要も聴きに来る必要もなく、聴衆の積極的な創造性によって多くのファンタジーが生まれ、はじめてかけがえの無い音楽となる。クラシック音楽の本質が本質的に作曲家、演奏家、聴衆による《三人婚》であり、その三者全員に果たすべき役割がある、と言ったのはポール・グリフィス(『文化のなかの西洋音楽史』音楽之友社)であったが、『ボンクリ』では有能なスタッフ達の存在がこのフェスティバルの個性を支えていることを忘れてはならない。昨年のスペシャル・コンサートで演奏したアルヴィン・シルシエ「Sizzles」という曲は、客席から仰ぎ見る、ステージ中央の高みに聖域のごとく聳える、東京芸術劇場のシンボルに等しい巨大なパイプオルガンの重低音を鳴らし、ステージ上に並んだ大小の太鼓の上に撒かれた何種類もの豆類や生米などを震わせるという作品を演奏?した。まず専門のオルガン奏者以外オルガンに触れることは勿論のこと、聖域にひとしい演奏台に立ち入ることなど許されないはずだが、この時は「アンサンブル・ノマド」のピアニスト中川賢一がオルガンを演奏した。直前までのスタッフ全員の涙ぐましい努力の結果、当日晴れて、ステージ上に配置された楽器上の豆類や生米が、まるで命が吹き込まれたかのようにひとりでに震え始めたのだ。『ボンクリ』は本番前にすでに始まっていることを如実にあらわすエピソードのひとつである。

ところで、『ボンクリ』ではどんな音楽が演奏され聴けるのだろうか? 全体のラインナップがアーティストック・ディレクター藤倉大によって選ばれるのだが、チラシには「世界中の「新しい音」が聴ける」と謳っているように、名付けることが出来ないほどに新鮮この上ない旬の音楽である。予備知識の必要のない開かれたジャンルと言い換えることもできる。音楽は作品であると同時に先ず音であり、過去の作曲家も音そのものの面白さの追求が原点となってきたはず。ドビュッシーが初めて四度の和音を鳴らした時、いったいどれ程驚いたことだろう! そのような音楽の創造の現場に遠慮なく立ち会えるのが『ボンクリ』である。人を動かす動機としてもっとも強いのは驚くことではないだろうか。たくさん驚きに来てほしい。

スペシャル・コンサート 14:00開演 コンサートホール

詳細はP18へ

出演：アンサンブル・ノマド(指揮：佐藤紀雄) 福川伸隆(ホルン) 八木美知依(箏) 本條秀慈郎(三味線) ヤン・バング(エレクトロニクス) エリック・オノレ(エレクトロニクス) アイヴィン・オールセット(ギター) ニルス・ベッター・モルヴェル(トランペット) 大友良英 萩原麻未(ピアノ) 藤倉大(エレクトロニクス) サウンドデザイン：永見電生 [Nagie] 曲目：モートン・フェルドマン/サムシング・ワイルド・イン・ザ・スティマリー・アンのテーマ(ホルン、チェレスタ、弦楽四重奏のための) "Morton Feldman Collection, Paul Sacher Foundation, Basel"

扶間美帆/囃
八木美知依/通り過ぎた道
「通り過ぎた道」PUNKTライブ・リミックス
テリー・ライリー/In C
坂本龍一/honj I-II(日本初演)
大友良英/新作(世界初演)
藤倉大/春と修羅(映画「蜂巣と遠雷」より)
藤倉大/ホルン協奏曲第2番(アンサンブル全編版世界初演)



佐藤紀雄 ©Kazuhiko Higashi 福川伸隆 Photo by Akane Taniuchi 八木美知依 Photo by Akane Taniuchi 本條秀慈郎 ©Kazuhiko Higashi 大友良英 ©Kazuhiko Higashi 萩原麻未 ©Marco Bongiorno

大人ボンクリ 19:00開演 コンサートホール

入場自由。参加アーティスト選曲による“出演者なしの電子音楽コンサート”。
※スペシャル・コンサートのチケット半券で入場可。

ボンクリ・フェス2019 特設サイト
borncreativefestival.com



ノマドの部屋(アンサンブル・ノマド) 「ボンクリ・フェス2018」より ©Hikaru

『ボンクリ』の大きな特徴の一つは一日限りのフェスティバルということ。今年のプログラムもメインとなるスペシャル・コンサート、小さな部屋で行う様々なプログラム、公共スペースで行うコンサートなど、全部で9つのプログラムを一日で聴ける、という大きな特徴があるが、近くからご来場する方は勿論のこと、遠方から訪れる人には涙がでるほど有り難いことではないだろうか。タイムスケジュールは綿密に組まれているため、体力次第では全てのプログラムを制覇することも可能。話は少しそれるが、工期が大幅に短縮され2026年に完成をみると言われているバルセロナのサグラダ・ファミリアは無数の大小の部屋に様々な鐘が設置られ、教会全体が大きなカリヨンとなって音楽を奏で、バルセロナの街をその音楽で満たす、と聞いたことがあるが、『ボンクリ』の日には、劇場前広場から見上げる東京芸術劇場が、音楽にあふれる音の大伽藍となるほど躍動しているように見える。この大きな劇場の中を、面白い音を巡って多くの人達が四方八方に移動している様子を想像したら、参加しないでいられる人などいないはず。

今年も見逃すことが出来ない企画のオンパレードで、例年のごとく、私はまた演奏者としてリハーサル、本番に参加するが、その合間を縫って出来るだけ多くの部屋を覗いてたくさん驚きたいと、今から意欲満々の構えである。

文：佐藤紀雄(指揮者・ギタリスト、アンサンブル・ノマド代表)